

119 フランス生まれのがま口（2022年7月7日）

先日、ルーアンにあるル・セック・デ・トゥルネル鉄工芸美術館を見学しました。この美術館には、門扉や階段の手すりなど建築に使われたものから、台所用品や装飾品まで、様々な鉄製品が展示されています。ここで、日本にある小物入れと似たようなものを見つけました。鉄の口金が付いた財布です。



フランスでは 15 世紀頃からこのような財布が作られました。当時はポケットのない服を着ていたことから、金具が付いた巾着袋をベルトにひっかけて吊り下げていました。袋の中には、小銭だけでなく、鍵や貴重品も入れました。時代と共に装飾性が増し、刺繍やビーズが施されたり、多色の織物生地で作られたものも誕生し、ヨーロッパの社交界で欠かせないアイテムになりました。



実は、日本にも開閉口に金具がついた財布があります。がま口と呼ばれ、和風小物として定着していますが、実はこれはフランスから取り入れたものです。

明治時代（1868-1912）になって、日本は欧米諸国との本格的な交易を開始し、様々な欧米文化を取り入れました。ヨーロッパを訪れた日本の商人が、当時フランスで流行していたがま口の鞆や財布を持ち帰り、それらを模倣して日本で売り出したのが、がま口の始まりだと言われています。ガマガエルが口を開けた様子に似ていることとカエルが金運の象徴であることから、その名が付けられたと考えられています。初期のがま口には真鍮が使われており、高価で庶民には手の届かない高級品でした。しかし、第二次世界大戦後に鉄の口金を使うようになって価格が下がり、一般市民の生活にも普及し、女性のファッションアイテムとして定着しました。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

日本では、がま口は少々古めかしいものだと
思われたときもありましたが、近年は、開口部
を広く開けて中身を確認できるので使いやす
い、素早く開け閉めできるなどの理由で、がま
口の良さが見直されています。和風洋風を問わ
ず、お洒落なデザインのがま口の財布や鞆が数
多く販売されています。



日本語で外国から持ち込まれたものを表記するときは、多くの場合はカタカナを使います。しかし、がま口には日本由来の名前が付いており、和装にも合うため、私はすっかり日本の伝統的な入れ物だと思い込んでいました。フランスに来て、日本の文化の中には、気付かないところでフランスから来たものが溶け込んでいるものがあることを発見しました。